

シアトルとシカゴ地域における日本人の子ども

— 異文化適応調査研究 —

梶 田 正 巳 川 上 綾 子¹⁾

I. はじめに

親の海外赴任をはじめとする家庭の事情により、やむを得ず日本を離れ外国の地で暮らしている子どもたちは、日々どのような生活を送りどのようなことを考えているのだろうか。このような点について、海外在住の日本人児童・生徒の約半数が生活している北米地域に焦点を当て、そこで暮らしている子どもたちの主に言語面・学習面・アイデンティティー面に関する調査研究のプロジェクトが実施されることとなり、その一環として筆者は、ワシントン州シアトル近郊のベルビュー市（1998年8月4日～7日）、及びイリノイ州シカゴ近郊のアーリントンハイッ市（同年9月17日～27日）を訪れた。それぞれの場所で、土曜日のみを開講している日本語補習授業校（シアトル日本語補習授業校とシカゴ双葉会日本語学校補習校）の協力を得、そこに通学する児童・生徒についてアンケートとインタビューによる調査を行った。さらに、児童・生徒以外にも補習校の教員に話を聞いたり、シカゴでは保護者へのアンケート調査や現地校（アメリカのコミュニティーの学校）の調査なども実施した。以下、その調査結果を報告する。ただし、今回の報告は、児童・生徒のインタビュー結果を中心にまとめたものであり、アンケート調査等については、紙幅の関係から特に関連のある場合において部分的に取り上げる形になったことを断っておく。

II. シアトルからの報告

1. 補習校の概要〈シアトル日本語補習学校〉

シアトル日本語補習学校は、シアトル市及びその周辺に日本から進出している企業140数社により組織されている「春秋会」が日本政府の補助を得て設置・運営しているもので、1971年、『シアトル日本人学校』として設立されたのが始まりである。当初の児童・生徒数は52名であったが、その10年後、現在の『シアトル日本語補習学校』と改名した当時にはその数は280名となっており、

調査を実施した1998年度には544名（幼稚園部56名・小学部333名・中学部110名・高等学部45名）の子どもたちが通っていた。児童・生徒数は増加の一途をたどっているように見えるが、日本の経済状況の影響を直接受けることもあり、600名を越える数の子どもたちが所属していた1991～1993年に比べれば、近年は550名前後にとどまっている。校舎は、設立当時のシアトル市内から、生徒数の増加に伴い再三の移転を繰り返して、現在はシアトル市郊外のBellevue市にある現地校を借用している。小学部はLake Hills Elementary Schoolという学校を、中学・高等学部はInterlake High Schoolという学校をそれぞれ借用しており、また幼稚園部は前年度まで小学部と同じ校舎を使用していたが、1998年度より小学部の学級数が増加したため教室数が不足し、現在はCoal Creek Chapelという教会に付属した保育園の教室を利用していた。

教員数は幼稚園部から高等学部まで合計すると約50名が在籍しており、そのうち文部省派遣教員は校長職と教頭職にそれぞれ1名ずつ就いている。

本補習学校の目的は、その規約の第4条に「本校は、一時滞在者の子女が帰国後日本の教育環境に円滑に適応できるよう日本の学校における主要教科及び生活訓練を補助的に行うことを目的とする。」とあり、具体的には、主要教科とは国語・算数（数学）・理科・社会の各科目を指し、生活訓練としては普段の授業日の指導に加え入学・卒業式、運動会などの各種学校行事を通して指導するということであった。小学部は各学年3～4クラスで1クラスには平均15名前後の子どもたちがいる。指導教科は、国語・算数・社会（あるいは生活）だが、1年生と2年生においては1998年度より「従来型学級」と「国語基礎重点型学級」に分かれ、後者は生活の代わりに国語を行っている。どちらの学級に入るかは保護者の希望による。中学部は各学年2クラスずつ、1クラスは約20名弱の生徒からなり、教科は国語・数学・社会・理科である。高等学部は各学年15名前後の生徒数なので1クラスずつであり、教科は中学部と同じ4教科である。ただし、社会は現代社会（高1）と日本史（高2）を行い、また3年生では理科がなくなり日本史中心の社会の時間

1) 鳴門教育大学学校教育学部助手

本論文は同氏の執筆によるものである。

が増える。1998年度の年間授業日数は47日間、授業時間数にすると幼稚園部・小学部1年生を除き274時間になる。これは、夏期集中授業を実施していることもあって、他の補習校より一般的に多い時間数となっている。

2. 補習校における全般的な課題

校長先生・教頭先生、さらに数人の補習校教員の方々の話によると、補習校における課題としては次の2点が非常に大きいものであると思われる。

①校舎借用にまつわる問題

補習校校舎として現地校を借用するにあたり、現在、その現地校が所属するSchool Districtに対し年間3万6千ドルの支払いが必要であるということであった。それに加え、例えば校庭の遊具を寄付するなどもしているらしいが、借用に際しては何かと現地校の都合に合わせなければならないことも多く、いろいろと気を遣うこともあるようだ。実際、本調査を実施した夏期集中授業期間は、小学部が通常借りているLake Hills Elementary Schoolが使用できず、Odle Middle Schoolという別の中学校を借用していた。日頃使用している学校が使えないとなると、代替りの学校探しは言うに及ばず、職員室の備品や各種教材教具の移動、児童やその保護者への周知等、日常業務にプラスアルファの仕事が加わってくることになり、教員の負担は増す。最近では、運動会開催日の直前になって、予定していた会場に大規模な工事が始まり、大急ぎで代替りのグラウンドを探したこともあったとのことだった。

また、借用した学校の校舎内外から教室内の机や黒板、現地校の生徒が置いて帰っている持ち物に至るまで、当然ではあるがすべて借りたときの状態のまま返さなければならない。そのようなルールを子どもたちに理解・実行させることは、現地校の校舎を借用している補習校の教員にとって非常に重要な指導の1つとなる。「廊下を走るな」という注意は、もちろん第一には子ども自身の安全を考えてのことであるが、その次には例えば廊下に飾ってある現地校生徒の作品を壊してしまうようなことを避ける意味が含まれているという。

②児童・生徒における家庭環境・ニーズ・能力の多様化

今回、本調査のためにシアトル日本語補習学校を訪問し、筆者の最も予想外であったことが、本補習学校に通う児童・生徒の育ってきた背景の多様さである。海外在住の日本人児童・生徒といえば、日系人やごく一部の永住者を除き、親の海外赴任に伴い限られた年数を外国の地で過ごす、近い将来いわゆる「帰国子女」となる子どもたち、というステレオタイプのイメージを持っていた。しかし、実際のところ、日本の（あるいは世界的な）社

会的・経済的状況の変化により、近年は海外在住の日本人といっても様々なタイプの人たちが存在する。アメリカで最近見られる傾向としては、企業の国際化等に伴う国際結婚の増加、雇用の増大による日本人採用の増加、駐在家庭の長期滞在傾向、企業の若年者派遣傾向などがあげられ、その結果、当然ながらそのような人々を親に持つ子どもたちの家庭環境も一様ではなくなっている。シアトル補習校も、数年間のみアメリカで生活する一時滞在の子どもたちに加え、(1)両親のどちらかがアメリカ人である、(2)日本人家庭であるが生まれも育ちもアメリカである、(3)日本育ちだが今後はアメリカで暮らす予定である、といった多様な生活史を持つ子どもたちで構成されていた。また、限られた人数ではあるが、日本で教育を受けた経験を持つ外国籍（日本・アメリカ以外の国籍）の子どもたちが含まれることもあるという。調査時も、ロシア人の両親を持つ児童が在籍していた。両親は日本で5年間程生活し、その間子どもを日本の小学校に通わせた経験から、現在も日本語補習校に通わせているらしい。

このような児童・生徒の生活史や家庭環境の多様化に伴い、彼らの知識・能力、彼ら自身あるいは保護者の補習校に対するニーズなども多様化し、補習校の果たす役割は、限られた年数をアメリカで暮らす児童・生徒が在学生のほとんどを占めていた過去と比べ、拡大せざるをえない。例えば、授業に対する要求としては、帰国後の受験を念頭に置いた学力の獲得を望む声から、基本的な日本語を教えてほしいという希望まであり、それらのすべてに対応していくことは非常に難しいこととなっている。また、児童・生徒の家庭環境の多様さは授業以外の面にも影響しており、例えば、両親とも日本語を話せない場合、家庭との連絡や交流が難しくなるという話を、複数の教員から聞いた。中には、家庭内で唯一日本語のできる父親が長期出張してしまったことがきっかけとなり補習校をやめてしまったケースもあったという。

国際化の波がもたらしたこのような状況は、シアトルのみならず各地の補習校で見られる傾向であり、現在、補習校のあり方について見直す時期に来ていることは確かであろう。今後は、補習校教育における“一時滞在者が将来帰国した折に日本での教育環境に順応できるよう教育する”という元来の目的は維持しつつも、地域に開かれた補習校という観点から、日本語補習学校として日本という共通の基盤を大切にしながら、高度な日本語の習得及び広義の日本文化の涵養を図り、真の意味での国際人を育成するということを目指していくことになるものと思われる。

その他にも、補習校特有の課題としては、家庭環境や

保護者の教育に対する姿勢などが児童・生徒の学習に直接大きな影響を及ぼすこと、日本で1年かけてやる学習内容を週1回という授業時間数で補わなければいけないこと、中学部・高等学部での生活指導が難しいこと等あげられる。このような解決しがたい種々の課題を抱えつつ限られた環境の中で開講されている補習校であるが、現地校での慣れない英語漬けの生活から週に一度日本語を思う存分話せて友だちと遊ぶことを楽しみにやってくる子どもたちにとっては、貴重なストレス発散の場もなっている。教員の方々も、そのような補習校の役割を大切にしつつ、子どもたちの指導にあたっているようだった。

3. 児童・生徒についての調査結果

子どもたちを対象とした調査は、上述したような言語面・学習面・アイデンティティー面の発達に関連した質問項目に加え在米年数や現地校・補習校の様子などを尋ねたアンケート調査、及び計21名の子どもたちに対して行ったインタビュー調査から成る。上で述べた通りここでは特にインタビュー調査の結果を中心に、言語面・学習面・アイデンティティー面のそれぞれについて報告する。なお、以下に登場するインタビューの結果は、特に断りのない限り、帰国が前提となっているいわゆる一時滞在の子どもたちから得られたものである。

1) 言語面

渡米したばかりの子どもたちの前にまず最初に立ちほだかるのは、やはり“言葉の壁”である。また、これは様々な問題の根底に常に横たわって間接的な影響を与えているものでもあり、この“壁”を乗り越えることによって解決する問題も多いようである。

アンケート調査では、英語について“話す”“聞く”“読む”“書く”の各側面につき「よくできる」「だいたいできる」「あまりできない」「ほとんどできない」の4件法で回答してもらったところ、いずれの側面についても、渡米後間もない数人を除いては「ほとんどできない」という回答はなく、多くは「よくできる」「だいたいできる」と答えていた。

しかし、インタビューでももう少し具体的に英語獲得の様子を尋ねると、やはり子どもたちはそれぞれに苦労をしているようである。各々の子どもの渡米した年齢や個人差によるばらつきはあるが、まず、子どもたちの話から英語を獲得していくプロセスをまとめてみるとおおよそ次のようなものになる。渡米直後の、現地校の先生やクラスメイトの言うことがほとんどわからない状態から、1ヵ月ぐらい経過すると、まず友だちの言うことがわか

るようになってくる。これは、その会話が常に自分が関与した文脈の中で交わされるため、言葉以外の手がかりが豊富に与えられることから理解しやすいのであろう。授業での教師の説明などがわかり始めるのはもう少し後で、学年が上がるにつれてそれに要する時間は長くなる。授業で使用される言葉が生活場面で出てくる言葉とは明らかに異なり難しくなること、言葉以外の手がかりが友人との会話などに比べ相対的に少ないこと、年齢が高くなれば「理解できた」という自己評価が厳密になることなどがその原因と考えられる。中・高校生の場合は、授業で教師の言うことがわかるには渡米後1年ぐらいかかったと答える生徒が多かった。「こちらから言葉が出る」、つまり発言できるようになるのはさらにその後、中には2年ぐらいかかったと答えた生徒もいた。相手の言ったことを聞き取るのにそれほど苦労を感じなくなっても、自ら発言することについてはある生徒（在米2年）の「しなければならないときは仕方がないのでやりますが……」との答えが示すとおり、日本に比べて生徒が発言する機会の多いアメリカの授業形態の中で、気後れせずに自分の意見を言うのはなかなか困難なことのようである。また、進んで発言できるようになったとしても、自分の考えを英語で過不足なくどこまで忠実に表現できるかという問題もある。渡米後6年を経過しているある生徒は、「授業中先生の言ったことはどれぐらいわかりますか？ もう100%？」との筆者の質問に「(100%)わかります」と即答したが、授業での自らの発言となるとまだまだ満足のいくものではないらしい。「言いたいことはあるんですけど、それを言葉にするのが難しくて……」という彼女に対し、「言いたいことの何%ぐらい表現できていると思いますか？」と尋ねてみると「70%ぐらい」という答えが返ってきた。友人との会話にはそのような苦労はないとのことなので、ある程度フォーマルな発言を求められた場合に限ってのことではあるが、6年を経過していても自己の発言に3割の歯がゆさを伴うということには、第2言語獲得という大きな“山”を感じざるを得ない。

また、渡米後2年を経過している高等学部のある生徒は、自分の英語獲得の経過を次のように話してくれた。「英語は“逆”になっちゃったんですよ。最初は書いて読めたのに聞けなかったんですけど、そのうちそれが逆になって、このごろは聞けてしゃべれるのに書けなくなっちゃった(笑)。—(略)—日本の英語の授業は読んだりばかりじゃないですか。それで、最初はそうだった(書いて読めたのに聞けなかった)んだけど、今は逆になっちゃって。」“文法ばかりに重点を置き、コミュニケーション(会話)能力が育ちにくい”という日本

の英語教育に関する問題点はすでに聞き飽きた感さえあり、会話力の育成が英語教育の目的のすべてではないと筆者自身も認識しているが、体験に基づいたこの生徒の言葉には考えさせられるものがあった。日本の英語教育については、幼稚園のころからアメリカで暮らしている高等学部の別の生徒からも、「日本から来た子は、英語の熟語とかいっぱい知ってて、私の方が知らなくて『何、それ?』っていうことも多いけど、話せない（会話ができない）んですよね。日本の英語は文法、文法でしょ」という指摘があった。日本の英語教育でも日常生活に必要とされる語彙と文法の習得は図られているので、それを基にすれば会話は可能なはずだとも言われる。しかし、コミュニケーションは、たとえそれが言葉を主としたものであっても、言語以外の多くの要因が働くものである。したがって、コミュニケーションができる（それも的確に）ようになるには、やはりそのための訓練が必要であり、そしてそれは、日本においては英語教育だけの問題ではないだろう。

2) 学習面

インタビューやアンケートによる調査結果から、補習校に通う（一時滞在の）子どもたちの学習面については、次のような課題が浮かび上がってきた。

①現地校の授業に必要な英語力の獲得

現地の授業についていくためには、当然ながらもまずは英語力の獲得・向上が必須条件である。多くの子どもたちが、渡米後数年間は週の何時間かをメインストリーミングから離れてESL (English as a Second Language) の授業に参加し、英語力の獲得を図る。それに加え、自宅でも家庭教師をつけて英語を勉強している子どももかなりいた。そのような努力をして、渡米後1年前後で授業における教師の説明がおおよそ理解できるようになり、それからさらに数ヶ月～数年を要して、やっと言いたいことの何割かを発言できるようになる。このプロセスについては上記の通りである。実際、アンケート調査における「現地校で困ったことはありますか」との問いに対し、「英語ができないというだけで他の同じ年の子がやっていることができなくてくやしかった」との回答が渡米後2年の中学生から寄せられた。

アンケート調査及びインタビューで子どもたちにESLについての感想を尋ねると、「ゲームやパーティが楽しかった」「遊んでいるような感じ」「シールをもらえるので嬉しかった」などの回答が複数得られ、ESLの教師が生徒にとって楽しい授業をしようと工夫を凝らしているのがわかる。上記のような回答に加え、小学生の児童からは「先生がやさしい」「とても詳しく教えてくれ

る」との感想もいくつか聞かれ、ESLに対してはpositiveな印象を持っているように思われた。それが中高生になると、「英語で英語を学ぶ難しさ」を感じるようになっていたり、習熟レベルの異なる生徒が一つのクラスでまとめて教えられることや、結局は同国出身の生徒同士でグループができてしまうことに疑問を持つという生徒も出てくるようである。また、自分はもうメインストリーミングだけでやっていきたいのにまだESLを出してもらえないとこぼす生徒もおり、おそらくは自尊心や自己評価の発達と共に、ESLに対する評価は辛くなっていくようである。

ただ、ESLには、英語の獲得という実際的な目標の達成以外にも、自分と同じく英語を使えない人間がいるということのを再認識する場として、メインストリーミングにおける子どもたちのストレスを軽減する役割もあるようだ。

現地校の学習をこなしていくためには、授業内容の理解に必要とされる英語力に加え、教師の種々の指示を理解する英語力ももちろん必要となる。中学部のある生徒は、現地校で困ることの一つに、教師に「怠け者と思われることがある」と言った。指示されたことがわからず課題などを「skipしてしまう」ことがあるが、「先生は、私がいつからこっちにいてどれぐらい英語がわかるか知らないだろうから」、怠け者と思われるってしまうのである。事情を話せば理解してもらえたとのことだが、各科目の教師にいちいち事情を話すのも面倒であろうし、言い訳のようで気が引けることもあるだろう。宿題への取り組みは、出された課題ができるか否かの前に、どのような宿題が出たのかを把握することから始まっていると言えそうである。

②家庭における学習量の多さ

子どもたちは、ウィークデイには現地校、土曜日には補習校という、2つの学校での学習をこなしていかななくてはならない。インタビューで子どもたちの話によく現れたことの一つに、「ウィークデイには遊ぶ時間がほとんどない」というものがあった。一般的に現地校では宿題が多く出されるらしく、ただでさえ言葉の面で不利な彼らにとって、毎日の宿題をこなすのはかなりの労力と時間を必要とするようである。そのため、子どもが小学生の場合などは特に、多くの家庭で夕食後の団欒の時間は親子そろって子どもたちの宿題に取りかかる時間となっているようだ。

その上に、通信教育や家庭教師による学習が加わったり、言語面でのdisadvantageを挽回しようと授業の予習・復習にまで手を回せば、毎日の勉強時間はおそらく日本の子どもたちに比べかなり多いものとなる。ウィー

クデイに遊べないというのは、中にはスポーツクラブに参加している子どもがいたり、基本的な移動手段が車であるために子どもだけで気軽に外出できないなどという他の理由もあるだろうが、帰宅後の時間の多くを宿題に費やさざるを得ない状況が大きな要因であることは確かである。

そして、これもインタビューした子どもたちの中でこの話題になった生徒のほとんどが話してくれたことであるが、たいてい金曜日の夜には、翌日の補習校に向けて一週間手つかずにしていた宿題が待っている。「土日にすぐやっちゃえばいいとは思いますが」と苦笑いする生徒もいたが、彼らのウィークデイの忙しさや現地校における精神的な緊張を考えると、おそらく日曜日は唯一ゆっくりと心を休ませることのできる日であり、そのような日に宿題を片づけてしまおうとはなかなか思えないのであろう。

ただし、ある生徒が話してくれたように、中高生になるとますます多くなる現地校の宿題を見越して「補習校では宿題を少なくしてくれる」ということもあるらしい。いずれにしろ、補習校の宿題の方は金曜の夜だけで何とかなることを見ると、子どもたちにとってまず大変なのはやはり現地校の宿題なのだろう。幼少期からアメリカで暮らし、もうほとんど英語には困らないと言うある生徒でも「現地校の宿題はとにかく量が多いので、毎日部活のあと夜中までやっているんです」と話していたことから、同じことをするのにこの生徒より数倍の時間がかかると思われる渡米後まもない子どもたちにとっては、帰宅後の時間は英語の辞書を抱えながら宿題との格闘に終始している時間ではないかと推測される。そして、おそらくは親をも巻き込んだ「格闘」が行われている場合も多く、補習校のある教員が話してくれたように、家庭での取り組みが子どもたちの学習の進行にとって重要な鍵となるということも納得できる。

③現地校における授業形態への適応

英語や授業内容以外に、学習面で子どもたちが適応していかなければならないのが、現地校における授業の形態・進め方である。先にも述べたが、日本で多く見られるような、教師の解説が授業の中心となる教師主導型の授業に比べ、アメリカの学校では子どもたちの発言を求めることが多い。そしておそらくは、その発言はYes/No式の単純な回答を求めるものより、自分の考えや意見を述べさせるといったものが多数を占めるのではないと思われる。また、授業の中で子どもたち自身の活動を促すことも多く、あるテーマについてグループに分かれて調べ報告するprojectと呼ばれる活動などもよく行われているようだ。

現地校で教師の説明が理解できるようになっても自ら発言することはなかなか難しいというのは上述したとおりであり、自分の英語運用に対する自信のなさが授業での発言に気後れを感じる第一の理由であると思うが、一方、上記のようなアメリカの授業形態自体に子どもたちが慣れていないため発言しにくいということもあるだろう。自分の考えを述べなければ考えていないと見なされてもしょうがないといった気風さえあるアメリカ社会において、現地の子どもたちは当然のことながら、学校教育で幼い頃から自らの意見を的確に表明するためのspeechの訓練を積み重ねてきている。そのような子どもたちが、教師の問いかけに対して次々に手を挙げ、自分の意見や調べてきたことを堂々と発表する様子は、日本から来た子どもにとっては当初新鮮な光景でもあるだろうが、これから自分がここでやっていかなければならないと考えたとき、大きなプレッシャーともなるだろう。

学校の授業とは関係のない文脈ではあったが、補習校のある生徒は、日本人とアメリカ人との違いについて「アメリカ人の場合は、何か言うとき、いつも理由や意見をきちんと説明しなくてはいけないけど、日本人なら全部言わなくてもわかるといった感じがある」と答えていた。彼女の答えが表すような違いは、どちらがいい・悪いといった問題ではなく国民性や文化の違いとも言えるものである。ということは、教育がそれに影響を与え、また影響を受けているのは自明のことであり、両国間で授業形態が異なるのは当然といえば当然なのだが、それは英語力というスタート地点でのdisadvantageをさらに大きくするよう作用しかねない。“全部言わなくてもわかる”日本で育ってきた子どもたちが、“何か言うとき”は“いつも理由や意見をきちんと説明しなくてはいけない”アメリカでの授業に対応していくための方策が必要とされるところである。

その点では、現地校のESLの教師も工夫しているようである。高等学部のある生徒の話では、彼のいたESLの教師は、彼らがメインストーリーミングの授業で発言するというのに慣れさせるため、成績の一部として4回発表すると10点を加えるというシステムを採っていたそうである。それにより、「発表しないと成績が上がらないから発表するようになって、そうすると他の授業でも発表できるようになった」と言う。「授業で発表はできますか？」という質問に対し、この生徒が「ええ、だいたい」と答えた後で自らこの話をしてくれたのは、彼が“ESLでのこの訓練により自分は発表できるようになった”と強く認識しているからであろう。このESLの授業で教師が目指していたのは、発言に必要な英語力の育成というよりも、むしろ、自分の言いたいこと

を多少不十分な英語でも臆せず言う態度を身につけることであったと考えられる。単純な方法ではあるが、子どもたちの現地校授業への適応を考える際、一つのヒントになるのではないだろうか。

3) アイデンティティー面

アイデンティティーの形成において、アメリカで生活する子どもたちの特徴となるのは、日本だけで暮らしている子どもたちより、“日本人であること”や“国による文化や生活習慣の違い”をより強く意識したり、またそのことから“国家”や“人種”“民族”というものに考えを巡らせたりすることであろう。

「日本人とアメリカ人で違うところは？」という問いに対し、前述の“全部言わなくてもわかる”日本人と“いつも理由や意見をきちんと説明しなくてはいけない”アメリカ人というある生徒の回答以外にも、インタビューでは次のような意見が聞かれた。

- ・アメリカ人は自分の意志を持ち、個性を主張するが、日本人は“みんな一緒に”の感が強い。
- ・日本は便利だが、みんな“急いでいる”感じがして息苦しくなる。アメリカはもっと自由な雰囲気。
- ・アメリカ人と比べ、日本人は自分の意見をしっかり持たないので自分をすぐ見失い、精神的に弱く、目に“輝き”がない。
- ・日本人はすぐグループを作ってかたまる。
- ・日本人は差別感が強い。日本はほとんど日本人ばかりなので、外国人が来るといじめたりするが、アメリカではもともといろんな人種が混ざっているのですんなりとはしない。
- ・日本人は感情を外に表さないで損をしている。一方、アメリカ人は感情をストレートに出すが、それは、アメリカが多民族国家なので思っていることを表に表さなければ通じないからだ。

これらの意見の妥当性はともかくとして、日本人とアメリカ人を比較したときに日本人に対して positive な意見を述べたのは、上記の「日本人なら全部言わなくてもわかる」といった感じがある（のでいい）」と言った生徒だけで、それ以外はすべて日本人に対して辛口の意見であった。これは、彼らが日本を離れて外国で暮らすことによって、日本を客観的に眺め、その結果批判的に捉えることができるようになってきていることを示すとともに、何よりも彼らがやはり日本を意識せざるを得ない日本人であることを表しているのではないだろうか。おそらく、もっと続けて話を聞いたならば、アメリカへの批判やそれに対する日本の良さ、といったものも耳にできたかもしれない。しかし、限られた短いインタビュー時間の中

で幅広くいろいろなことを聞こうとしたために、結果として、それぞれの質問項目につき深く突っ込んだ話が聞けたとは言い難い。そのため、上記の回答も「日本人とアメリカ人で違うところは？」という質問に対し、ほとんどがまず最初に口にしたものである。そして、そういった場合にまず口をついて出てくるのは自分の国に対する負の評価であり、それは、インタビュアーの後ろに存在する不特定多数の自国の人間（と過去の自分自身）に反省を促したいといった、おそらくは無意識の感情によるものではないかと思われる。また、上記のような意見が、自己の関与しているものについては少し卑下してみせる、といった行動傾向から来るものだとすれば、それなどはなお一層彼らが日本人であることを如実に示していることになる。

自己について思いを巡らせる場合に、普通に日本の中だけで暮らしていればそれほど強く意識することのない“日本人である”ということを考える、つまりは自分の持つ属性の一つとして“日本”や“日本人”といった国家や民族をあてがわざるを得ない環境で育つことは、アイデンティティーの形成にどのような影響を及ぼすのであろうか。これについての解答を今回の調査だけから導くのは困難であるが、異国の地で生活している以上、望む望まないに関わらず彼らが日本を代表せざるをえない状況に直面することも多く、それによって自尊心が高まることもあれば苦境に立たされる場合もあるだろう。後者の場合は子どもたちにとってかなりの試練ともなり、中にはつらい思い出となって心に刻まれてしまうこともあるかも知れない。しかし、このような試練は、考えてみれば外国の地で生活できたための貴重な経験であり、自分がいろいろな意味において鍛えられる契機でもある。そのことに気づき、“日本人である”ことに伴う葛藤やアメリカで暮らした意義を自己の成長過程の中に位置づけることができれば、その子どもはアイデンティティーの獲得に向かって大きな一歩を踏み出しているのではないだろうか。そしてそこでは、“日本人である”ことを自己の一属性として明確に捉え、それを基盤とした上で、国家や人種、あるいはそれらから派生する文化や習慣による違いを尊重できる人間が形成されつつあるだろう。

III. シカゴからの報告

1. 補習校の概要〈シカゴ双葉会日本語学校補習校〉

シカゴ双葉会日本語学校補習校は、シカゴ市郊外北西部、ミシガン湖からもほど近い Arlington Heights 市にある。1966年にシカゴ日本商工会議所が設置団体となって開校した。設立当初は児童・生徒数49名、バプテスト

教会を借用してのスタートであった。その後、児童・生徒数は徐々に増加し、調査当時（1998年）は、幼稚部104名、小学部436名、中学部107名、高等部54名の計701名が在籍していた。シカゴ市がアメリカで3番目に多い人口を抱える大都市であるためこれほどの数になるわけだが、それでも児童・生徒数が約1000名を数え校舎を3校使用していた1990年代初めに比べるとやや減少してきたことになる。そのあたりはシアトルの補習校と同じ状況である。

この補習校が、アメリカあるいはそれ以外の国にある他の補習校と大きく異なっている点は、ウィークデイに開かれている全日制の「シカゴ日本人学校」と同時運営され、2校共同ながら自分たちの専用校舎を所有していることである。同じ教室をウィークデイには全日校の児童・生徒が、土曜日には補習校の児童・生徒が使用するわけで、子どもたちにとっては“自分だけの机”というわけにはいかないが、シアトルで耳にした現地校校舎の借用にまつわる種々の不都合から考えれば、この補習校は恵まれていると言えるだろう。また、調査にうかがった年度は、それまでのNilesという街からArlington Heightsへと校舎が移転し、前年度までの本校・分校が分かれた2校体制から1校体制へと変わった年であった。校舎が分かれているために発生する学校間の連絡や教員の行き来に伴う不便さも、この年から解消していたことになる。

教員は現地採用の34名に、文部省派遣の2名（校長と教頭）、さらに全日校と兼ねてやはり文部省から派遣されている“国際交流ディレクター”が1名という構成であった。

クラス数は、幼稚部4、小学部各学年3、中学部各学年2、高等部各学年1であり、1クラスあたりの児童・生徒数は、20名を切るいくつかのクラスを除き、多くは25～30名ぐらいである。授業は、小学部と中学部では国語と算数（数学）に加え、道徳・学級活動が行われているが、小学部6年と中学部は国語と算数（数学）について「じっくりコース」と「いっぱいコース」に分かれ、子どもたちのレベルに沿った特色のある指導を行っている。高等部は教科選択制で、数学（Ⅰ・Ⅱ・演習）、SAT（数学）、国語（Ⅰ・Ⅱ・読解・言語）、小論文、作文、英文法、TOEFLといった科目に加え、学級活動がある。その他、日本語学級を小学部から高等部までの通級として開設し、第一言語が英語である生徒などの日本語の補完にも努めている。

2. 周辺現地校におけるESLの概要など

シカゴでは現地校を訪問する機会が与えられ、

Adolph Link Elementary School, Romona Elementary School, Dryden Elementary School, Thomas Middle School, Highcrest Middle School, Buffalo Grove High Schoolの計6校を訪ね、現地校教師に話を聞いたり授業を見学したりすることができた。ここでは、そのうち特にESLの授業を見学できたAdolph Link Elementary SchoolとRomona Elementary Schoolについて、ESLの様子や現地校教師から聞いた話を報告する。

Adolph Link Elementary Schoolは、生徒数約550名の、当該のSchool District内では中規模の小学校である。そのSchool District内には28校が含まれているが、うち、日本人を主な対象としてESLを開講している学校が3校あり、Adolph Linkはそのうちの1校である。そのため、ESLの時間には周辺の小学校から日本人児童が集まってくることになる。

ESLのレベルは3段階に分かれており、筆者が見学したのはレベル1（初級）とレベル2（中級）の授業であった。レベル1は主に小学校低学年の児童を対象としており、筆者が見学したときには、種々の単語とそのカテゴリーについてカードや切り抜きを用いた学習をしていた。子どもたちは1名を除き全員が日本人なので、子ども同士がときおり日本語で話す声も聞かれた。また、担当教師は日本人男性と結婚していることから日本語ができるため、何度か生徒たちへの指示を日本語で行っていた。ただし、これについて後で訊くと、日本語による指示はレベル1に限ってのことであり、また本来は減多に行わないのだという。この日は、筆者を含め日本人が4人程見学していたので、子どもたちは特に日本語でおしゃべりしていたらしい。それに対する注意もあって、この日はいつもより日本語を多く使ったとのことであった。通常はほとんどを英語によって説明しているが、全部はわからなくても子どもたちはお互いに教え合いながらやっていると言う。レベル2は、その日、生徒は3人だけであったが、教師を含め小さな机を囲み、絵本を用いて母音・子音の区別や単語の発音の学習を行っていた。このように、習熟度によって一応のレベル分けはあるものの、各レベルの中にも様々なレベルの子どもたちが混在しているとのことで、その一人一人に対応するにはかなりの労力を必要とするようである。

Romona Elementary Schoolで見学したのも、やはり初級のクラスであった。ここでも、ESLの時間には、この学校だけでなく周辺の学校から子どもたちが授業を受けにやってくる。この日は、日本人が3人、韓国人が4人、あとドイツ・メキシコ・スウェーデンからそれぞれ1人ずつの子どもたちが授業を受けていた。この

日の授業内容は、前置詞の使い方の学習、歌、絵本の読み聞かせ、カードによる単語学習（前時の復習）、ビンゴゲームなどの活動から成り、バラエティに富んだものであった。70分という低学年にしては長い授業時間を子どもたちが飽きることなく学習できるように、教師は様々な工夫を凝らしているのである。担当教師に話を聞いてみると、低学年の児童に対しては生活レベルで必要となる知識を中心に指導するが、高学年の児童に対してはメインストーリーにおける授業の支援をすることも多いということで、ここでもESL教師には各学年やレベルに沿った幅広い対応が必要とされているようであった。

Romona Elementary Schoolでは、ESL以外の教師たちにも話を聞くことができた。彼女たち（全員女性であった）に他国から渡米してきた児童と比較して特に日本人児童が抱えている課題について尋ねてみると、言葉を選びながらも「完全主義のところがあり少しでも自信がないと答えようとしなない」「間違っても言おうという“リスク”をとろうとしなない」といった感想が多く聞かれた。また、「休み時間やランチの時間など、日本人同士でかたまっていることが多い」という指摘も複数の教員から聞かれ、それが適応に時間のかかる結果になっているとも話してくれた。授業については「算数はよくできるけれども、グループで話し合いを必要とするような課題は苦手ようだ」と見る教師がいた。これらはすべて、子どもたちに対する調査から浮き彫りになった課題と共通するものと言えるだろう。

3. 児童・生徒についての調査結果

シアトルの報告と同じく、子どもたちへのインタビューを中心に、言語面・学習面・アイデンティティー面の調査結果についてそれぞれ以下に述べていく。

1) 言語面

インタビューの結果から、英語獲得に関するおおよそのプロセスは、シアトルの調査結果と同様、友だちとは数ヶ月で意志疎通ができるようになるが、授業がわかるのは1～2年経過してからであり、自分から進んで発言できるのはもっと後、さらに満足いく発言となると渡米後数年を経ているでも難しい、というものであった。以下、インタビューにおける英語獲得についての子どもたちの話を具体的に紹介していこう。

渡米後2年が経過している高等部のAさんは、「英語は、最近になってちょっとは楽になってきましたね、聞いたり話したりは。でも、アメリカ人と比べると、やっぱりリーディングはすごく時間がかかるし、授業でクリエイティブ・ライティングっていうのがあるんですけど、

それなんかはまだしょっちゅう辞書を使っています。—（略）—日常会話はOKです。早口でしゃべられたり、あとニュースなんかを聞いてわからないこともあるけど。—（略）—授業中の先生の説明もわかりますよ。専門的な難しい言葉は、聞きとれても意味がわかんないですけど、後で調べたりして」と話してくれた。「最近になってちょっとは」という言葉に表れているように、2年の在米生活を経てやっと、日常会話で必要とされる“聞く”“話す”といった能力については本人もある程度の自信を持つほどに至ったようである。ただし、授業での読み書きについてはまだまだ苦勞しているようだ。また、授業中に発言できるかどうか尋ねると、「言えます。それはもう強制っていうか、『やるしかない』という感じだから。英語はめちゃくちゃでも、発表しなくちゃいけないときはしてます。やっぱり成績に関係してくるし……」と頼もしい回答が返ってきたが、その後「でもやっぱり恥ずかしいときはありますよ。嫌だと思いきもあります」と付け加え、不十分な英語で発言せざるを得ない複雑な心境をもらした。

同じく高等部のB君（渡米後4年半）は、「英語がわかるようになったなあと感じたのは、どんなとき？」という質問に、「辞書をあまり引かなくなってから、ですね。最初はいつも辞書引きまくってたから。まあ、辞書引いてもわかんなかったけど」と答え、「リスニングができるようになったのは2年ぐらい経ってから」と話してくれた。彼は、英語についてネイティブの家庭教師をつけており、それが非常に役に立ったと言う。

また、Cさん（高等部）は、渡米してほぼ3年になるが、アメリカにやってきた当初の苦勞について次のように話してくれた。「中1でアメリカに来たんですけど、友だちはすぐにできませんでした。初めは英語をまったくしゃべれなかったし。アメリカ人は、私が外国人ということで、興味を持って話しかけてくれるんですけど、こっちが何も答えられなくて。それでも当分はまだ話しかけてくれるんですけど、私はずっと答えられないから、そのうちだんだんもう話しかけてくれなくなっちゃって、それで友だちができなくて……。」彼女は、インタビューで話をする限り、とても明朗な感じで受け答えもきはきしていたが、そのような彼女でも、渡米した当初は上記のように、英語ができなために当分の間友だちもつくれなかったと言う。せつかく話しかけてきてくれるのにそれに対して答えられず、そのせいでクラスメイトたちが自分から去っていくのを黙って眺めているしかないという状況は、とても歯がゆく悔しくつらかったに違いない。しかし、彼女が賢明であったのはその後の態度である。下手をすると、それからますます内にこもってし

もうという道を選択する場合もあるが、彼女は「それで、今度は『自分から』って思ったんです」という言葉の示すとおり、自らクラスメイトたちの輪の中に入っていきよう努力したと言う。それで、今となっては「アメリカ人は開放的でつきあいやしく、すぐ仲間に入り込めるけど、日本人は何人かですぐ集団を作ってコソコソしている感じ」との感想を持つまでに至っており、できればアメリカですと暮らしたいと考えるほどになっているのである。

ただし、そんなCさんでも、“話す”ことについては友人との会話においてさえやはりまだ多少の不自由を感じるらしく、「今はもう言いたいことは全部言えますか?」と訊くと、「パッととは言えないですね。日本人と話してるときみたいにパッと。英語だと）頭の中をちゃんと通して、みたいな（笑）。日本語だったらここからそのまま出る（喉元から口を指して）みたいな感じだけど、英語だとこういう感じ（頭をぐるっと回って口元を指す）」と話してくれた。友人との会話については、インタビューしたたいていの子どもたちが「まあ、できます」と答え、渡米後数ヶ月もすればなんとかこなしているのは確かなようであるが、“どこまでできているのか”という評価基準を、例えば日本語と比較するなど厳密にした場合には、おそらくこのような不都合を多くの子供たちが感じていることだろう。渡米して4年半になるある生徒（中学部）の、「日本語の方が自分の感情を表しやすいと思うことが時々ある」という言葉も、外国語を使って自分の思いや考えを表すことの難しさを示している。

しかし、AさんやCさんの話から学ぶべきことは、自分が不利な場面・苦しい状況に置かれたときに、まず『やるしかない』『（今度は）自分から』と考えることの大切さである。Aさんの場合は、授業での発言という英語獲得過程での最も困難な課題を、（多少の恥ずかしさはあるものの）『やるしかない』とある意味開き直すことで克服している。Cさんの場合は、クラスメイトがなかなか口を開かない彼女を見限り離れていったという、渡米直後の一番つらい時期に『（今度は）自分から』と決断し自ら進んでクラスメイトと交流を図り、その結果アメリカ生活の適応に成功した。現地校の授業についていく、アメリカ人の友人をつくるといったときに英語力の獲得は必須条件であるが、一方、その英語獲得のためには、授業で「英語はめっちゃくちゃでも」発言したり、不十分な英語を使いながらも自ら友人の輪の中に入っていったりすることが、また欠かせないことなのであろう。アメリカに限らず外国で暮らす場合、“その国（人・物を含めて）といかに主体的に関われるか”がそ

の国の言語の獲得を左右する大きな要因であり、そのような主体的な関わりこそが、その地の生活に適応しさらに成長していくために必要となる、様々な壁を乗り越えていく力ともなるのであろう。

2) 学習面

学習面に関する子どもたちの話からは、やはり現地校の宿題の多さに苦勞している様子がうかがえた。補習校の宿題をやる金曜日を除き、ウィークデイの帰宅後の時間をほとんど現地校の宿題に当てなければならないという事情は、シアトルの調査結果と同じである。

また、今回は、現地校での授業科目について、どれが難しいと思うかを何人かの生徒に訊いてみた。当然ながら、第一にあげられるのは現地校での国語にあたる英語である。ESLの授業についてはあまり困難さを感じている様子はないが、メインストリーミングで英語の授業がある場合は大変らしく、ある生徒は「もう、辞書引いて、文章読んで、また辞書引いて、の繰り返しです」と話してくれた。その他には、理科と社会について難しいという感想が聞かれた。おそらく、理科は専門用語として耳慣れない単語が多く出てくること、社会は、アメリカ人が一般的・常識的に持っている知識（例えば合衆国史に関する出来事）や価値観を日本人生徒が持ち合わせていないこと、などが難しいと感じさせる理由であろう。それらに対し、「わかりやすい」「わりと簡単」といった声が聞かれたのが算数・数学である。“日本人の子どもは算数・数学がよくできる”と言われるが、子どもたち自身も他の教科に比べ算数・数学については楽な印象を持っているようだ。内容の理解において英語そのものに依存する部分が他の教科に比べ少ないこと、日本語における数唱の有利さなどが、その大きな要因であると思われる。

科目ごとの理解度については、アンケート調査でも取り上げている。各自が現地校で学んでいる各科目を書いてもらい、その横に、よくわかる場合は◎、（普通に）わかる場合には○、わかりにくい場合は△の印をつけるよう求めた。その結果、特に中学部・高等部の生徒たちでは、Science, Biology, Physics, Chemistry, Social Study, U.S. History, Geography, Government, English, Spelling, Reading, Creative Writingといった科目に○や△が比較的多く、それに対しMathやAlgebraには◎が多かった。インタビューで得られた結果と同様の傾向が、アンケート調査でもみとめられたことになる。

次に、ここでも授業中の発言ができるか否かについて尋ねてみたところ、リスニングにはもうほとんど困らな

いと答えた生徒でも、「他の人がやればいいや、と思っているところがありますね」（在米4年半の高等部の生徒）、「進んで手を挙げることはありません」（在米2年半の中学部の生徒）といった声が聞かれ、自分から発言することの難しさを改めて感じさせられた。これについては、自分の英語力に対する自信のなさに加え、生徒が発言する機会の多いアメリカの授業形態への不慣れがその原因ではないかと、シアトルの調査報告の箇所でも述べたが、今回のインタビューでは、先に登場した“やるしかない”と考え“英語はめっちゃくちゃでも発表”するAさんをはじめ、次のような頼もしい回答も聞くことができた。同じく上で登場したCさん（高等部）は「自分の持っている英語力でやってます。そんなに難しい単語とかは使わないで。周りも（自分のことを）わかっていますし。自分に合ったレベルの英語でちゃんとできるかぎり相手にわかるように発表すれば、と思っています」と話し、また渡米後4年半程のDさん（高等部）も「（発言は）平気ですよ。『ハイ、ハイ』って手を挙げちゃう（笑）。クラスが変わった初めはちょっと恥ずかしいこともあるけど、だんだんみんな（自分のことを）わかってくるし。100%全部言えなくてもいいやって」と答えた。Aさん・Cさんについては、前述の通り、自分たちの不利な状況を、主体的・積極的に自ら進んでいくことで克服した人たちである。また、Dさんも非常に明るく活発な印象の生徒で、本人曰く“もともと日本人の少ない現地校に通っていることがよかった”のか、アメリカでの生活を満喫している感じが見てとれた。3人に共通するのは、「めっちゃくちゃでも」「自分に合ったレベル」「100%全部言えなくても」と言葉こそ違え、自分の英語が不十分であることを承知した上で、それでも自ら発言していく姿勢である。日本人は完璧を目指すあまり内にこもってしまうとよく言われるが、決して無理をしたり見栄をはったりする必要のないことを、彼女たちの話は教えてくれている。彼女たちのような、無理をしない、それでいて積極的な姿勢こそが、英語力のブラッシュアップにつながり、それが自信を生み出せば結果的に授業の発言をますます促すこととなるだろう。そして、こういった姿勢が重要なのは、授業の発言場面のみにとどまらず、自己の成長のためにおそらく生活全般において言えることである。

3) アイデンティティー面

今回のインタビューでは、偶然ではあるが、渡米してから現在までの、自らの内面や行動に生じた変化について話しているうちに、それがアイデンティティーに関わる話題へとなっていった場合がいくつかあった。

例えば、先ほどから数回登場しているAさんは、「アメリカに来て一番つらかったことは何か」と尋ねると、「言葉が操れないから、やっぱり友だちとのコミュニケーションで困りましたね。最初（アメリカに）来たときは、友だちも全然できないし、英語もしゃべれないし、今までになかったぐらい落ち込んで……。日本では私はどっちかという、よくしゃべって人を笑わせたりしてっていう楽しいグループにいた方で、おとなしいグループではなかったから、自分らしくできない、しゃべったりとかできなかったのがつらかったです。英語が操れない分、自分らしさを表現できなかったというか……」と“自分らしさを表現できない”ことのつらさを回想し、その後「でも、そういうのを通じて、いろいろ自分こともわかったし。自分がどういう性格なのか、とか。そういうことを、この年でいろいろ知れたなあと思います」と続けた。彼女の場合、渡米直後のつらい時期を経験することが自分自身を見つめる契機となったのであるが、現在では、それによって得た自己の性格特性の認知に加え、つらい経験によって自分を知ったこと自体に対するpositiveな認識さえある。さらに、“自分らしさを表現できなかった”つらさを“過去の自分”の経験として客観的に捉えてもいる。

渡米後約4年半が経過している高等部のEさんは、アメリカに来た当初の思い出として「よく覚えてるのは、最初（現地校の）小学校6年に入ったんですけど、自分一人だけ怖がってました。たぶん、今思えば、周りの子たちは他にもいっぱい日本人とか韓国人とかいるから慣れていたんだとは思いますが、私は初めてだったから、オフィスで待ってるときも、アメリカ人が前を歩いたりすると隠れていたりして……」という話をしてくれた。それを受けて筆者が「じゃあ、そういうことを克服して、自分を出せるようになるにはどれぐらいかかるの?」と訊くと、「3年、いや、もっとかなあ……」と答え、日本人の多い現地校に通う彼女が初めは「気がついたら日本人とばかりしゃべってて、それじゃいけないっていうのはわかってたんだけど、楽な方に楽な方に」行ってしまったことを振り返った。それが現在では、「あと1年で帰国だから、せっかくだからアメリカ的な学生生活を思いきり送りたいので、意識的に日本人と集まるのは避けてます。（日本人ばかりで集まっている人たちに対しては）いいかげんにしないとダメなんじゃないのって教えたくなるぐらい」とまで言っていた。彼女も、理由もなくアメリカ人を怖れていたりと、日本人とばかりしゃべっていたりした自分を“過去の自分”として捉え、前向きに反省し、それらの経験の上に“現在の自分”があることを認識している。そして、「せっかくだから

「アメリカ的な学生生活を思いきり送りたい」という言葉には、アメリカでの経験を将来においても大切なものと位置づけたい気持ちが表れているように思える。

中学部のF君（渡米後2年半）には、アンケート調査の「アメリカに来て自分が変わったと思うことはありますか」という質問項目に対して「自信ができました」と回答していたので、それについて詳しく訊いてみた。すると、おとなしい印象の彼は日本にいたときから授業中あまり発言する方ではなかったが、アメリカでは授業中に指名されれば「英語で話さないといけないけど、話すらしい。つまり、“完璧にできない英語を使ってもこれだけ発言できる”との思いから“自信”へとつながったようで、最後には「(アメリカに来たのは)いい経験になったと思います」と自ら語った。これまで日本で感じることもなかった新しい種類の自己効力感を、彼はアメリカに来たことで得た。不十分な英語で話さなければならないという不利な状況にきちんと向き合ったことで、彼は“思っていた以上にできる新しい自分”と出会うことができたのである。

彼ら3人は、それぞれ、ある種の試練に遭遇しそれを乗り越えることで、自己を見つめ直す機会を与えられた。それにより、自分らしさを認識したり新たな好ましい自分と出会ったりしたことは、自己をユニークな存在と認め価値づけることにプラスの作用を及ぼすであろう。すなわち、彼らは自らの経験をもとに、アイデンティティの獲得に向け前進したと言えるのではないだろうか。彼らが遭遇した試練はアメリカにやってきたからこそ直面したものであることに違いないが、それを克服することによって、F君の「いい経験になった」という言葉が示すとおり（なお、この言葉は他の数人の生徒からも聞かれた）、アメリカでの生活を自分史の中で意義あるものとみなすことが可能となっている。上述『シアトルからの報告』で“…アメリカで暮らした意義を自己の成長過程の中に位置づけることができれば、その子どもはアイデンティティの獲得に向かって大きな一歩を踏み出しているのではないだろうか”と述べたが、彼ら3人の話にその一端を垣間見ることができたような気がした。

IV. さいごに

調査の実施にあたって補習校を訪ね、子どもたちの話を聞き始めてまず感じたのは、“アメリカで暮らす日

本人の子ども”という共通基盤こそあれ、それぞれの子どものパーソナリティをはじめとして、渡米した年齢や時期（例えば現地校での適応を考えた場合、年度途中よりも年度初めに転入する方がよいと言われる）・家庭環境・周囲の状況（日本人が多い地区であるとか現地校での協力体制など）・これまでの生活史等々、子どもたちのアメリカ生活、ひいては言語面・学習面・アイデンティティ面の発達に影響を及ぼす要因は各種あり、調査したあげく結局は“それぞれの子どもによって違う”という結論を導くだけではないか、ということであった。しかし、子どもたちの話をもう少し注意深く聞き分析的に捉えなおしてみると、もちろん“それぞれの子ども”に依存する部分も多いが、個人の違いを越えて、いくつかの側面ではある程度1つの方向を示している場合のあることに気づき始めた。本報告は、それらについて考察したものと云える。

子どもが異文化の中で成長していくには、さまざまな壁を乗り越えていかなければならない。その地の“言語の獲得”はその中の最たるものであるが、それは他の壁の克服に大きな影響を与えるという意味において重要な鍵となる。しかし同時に、言語を獲得するために乗り越えるべき壁もある。それは、前述したように“その国との主体的な関わり”である。異文化の中に放り込まれることにより周囲の環境が激変したとき、種々のトラブルや不快な場面に遭遇するのは必至であるが、それと向き合うか。そこで、現地の人間をはじめとするその国との積極的な相互作用を図ることができれば、文化による違いを認識し、自分を見つめ直す契機を得られる。そして、そこに自信が生まれ、異文化での経験を意義あるものとして自己の中に取り入れることが可能となったとき、異文化への適応は成功したと言えるのだろう。そのときの“適応”とは、決して異文化に受動的に取り込まれそれに媚びることではなく、違いを違いとして受け入れ、それを基盤とした上で人間としての成長が期待できるものであるに違いない。

（附記）

本調査にご協力頂きました多くの方々に記して感謝の意を申し上げます。

（1999年9月16日 受稿）